

## ◎ 美術館情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの美術館等で、臨時休館やイベントの休止、展覧会の中止や開催期間の変更、および入館方法等が変更になっています。

状況が日々変動しているため、各施設の公式ホームページなどで最新の情報をご確認ください。

### 1. 横山美術館【愛知・名古屋】 (<https://www.yokoyama-art-museum.or.jp/event/>)

10月3日(日)～2022年1月10日(月・祝)

企画展： 優美な曲線から歴史が伝わる カップ&ソーサー物語

日本国内でカップ&ソーサーの生産が本格的に始まったのは明治時代前期からです。当時の日本にとってハンドル付きのカップは未知のものであり、制作は困難を極めました。伏焼や石膏型成形などの新しい技法を取り入れ、大きさや厚さ、形状が整った器が作られるようになりました。工夫を凝らして出来上がった生地には、日本的な花鳥や洋風の薔薇など、さまざまな題材で豪華な絵付けがされ、海を渡り、テーブルを華やかに演出しました。本展では、明治・大正時代に日本の各産地で制作されたカップ&ソーサーやポットなどを加えたティーセットを展示します。



### 2. 瀬戸蔵ミュージアム【愛知・瀬戸】 (<http://seto-cul.jp/information/index.php?s=1628839515>)

8月14日(土)～11月7日(日)

企画展： 瀬戸染付ー山水画の世界ー

今から約 200 年前の江戸時代後期に始まった瀬戸染付は、白い器に青色の顔料の呉須を使って花や鳥、山水、吉祥など様々な文様の絵付けが施されてきました。その中で山水画は絵付け文様の中心のひとつとして描かれ、瀬戸染付草創期から今日までたくさんの作品が生み出されてきました。元々山水画は飛鳥時代から日本でも描かれていましたが、江戸後期に中国の影響を受けた南画が全国で流行したことで、多くの絵師により山水画が描かれました。山水画は自然の雄大さを感じさせるとともにその世界に自分の身を置いてみたいという願いや憧れを込めた理想郷として描かれた側面もあります。当時の人々の注目を集めていた山水画が瀬戸染付の題材として取り入れられたのも当然のことで、こうした絵の指導は瀬戸を訪れた南画系の絵師などにより行われたといわれています。



本展では、館蔵品を中心とした江戸後期から昭和にかけての山水画が描かれた瀬戸染付作品を展示、絵具の濃淡や繊細な筆さばきによって水墨画のような幽玄な印象を与え、時代を経ても私たちの心を惹きつけてやまない山水画の世界を紹介します。

### 3. 石川県九谷焼美術館【石川・加賀】 ([kutani-mus.jp/documents/R3sche.jpg](http://kutani-mus.jp/documents/R3sche.jpg))

前期 10月9日(土)～12月5日(日)

後期 12月11日(土)～2022年2月13日(日) <前期・後期を総入れ替え>

特別展： 吉田屋と栗生屋の至宝

東京国立博物館、京都・野村美術館、愛知県陶磁美術館、鶏声磯ヶ谷美術館等所蔵の門外初出品の吉田屋や栗生屋をはじめ、加賀の地元に多く残る名品を一堂に展示します。

#### 4. 多治見市美濃焼ミュージアム【岐阜・多治見】([https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki\\_museum/archives/5459](https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/archives/5459))

10月1日(金)～12月26日(日)

企画展： 明治・美濃 超絶三人展－加藤五輔・西浦圓治・成瀬誠志の世界－

明治時代の美濃の地では、ほとんどの製陶業は日常食器製作を生業にしており、美術陶器・豪華品の制作のみでは生活できませんでした。このような状況の中でも、明治政府が積極的に参加を企図した万博に、加藤五輔・西浦圓治・成瀬誠志が呼応し、三人の作品は様々な賞を受賞しました。その技能は国内外で高く評価され、表現様式は三者三様ですが、名工として、または、名プロデューサーとして同時代に生き、美濃焼に対し熱情を持ち取り組んでいきました。

本展では、こんな時代背景の中から出現してきた人物にスポットをあて、それぞれの精巧緻密な作品を展覧します。明治期、美濃の中心として活躍した三人の生き様を、作品を通して見ていただければ幸いです。

※開催について変更する場合があります。詳細は当館ホームページで確認ください。



#### 5. パナソニック汐留美術館【東京・港区】(<https://panasonic.co.jp/ls/museum/exhibition/21/211009/>)

10月9日(土)～12月19日(日) (事前予約制)

企画展： ブダペスト国立工芸美術館名品展－ジャポニズムからアール・ヌーヴォーへ



ジャポニズムとアール・ヌーヴォーをテーマに、エミール・ガレ、ルイス・カンフォート・ティファニーらの名品と共に、ブダペスト国立工芸美術館のコレクションからジョルナイ陶磁器製造所などで制作されたハンガリーを代表する作品群を含む約170点をご紹介します。日本の美術を西洋がどのように解釈したか、そして日本の美術や工芸がどのようにして西洋に影響を与えたのか、そのありようを19世紀末葉から20世紀初頭までの工芸作品の作例を通じて辿ります。

#### 6. 京都国立博物館【京都・東山】([https://www.kyohaku.go.jp/jp/special/korekara/hatakeyama\\_2021.html](https://www.kyohaku.go.jp/jp/special/korekara/hatakeyama_2021.html))

10月9日(土)～12月5日(日) (事前予約優先制)

特別展： 畠山記念館の名品－能楽から茶の湯、そして琳派－

荏原製作所の創業者である畠山一清(はたけやま いっせい、号：即翁<そくおう>)が蒐集した美術品を収蔵する畠山記念館。本展は改築工事のため長期休館中の同館コレクションのなかから、茶道具を中心とする日本・中国・朝鮮半島の古美術の名品を紹介し、即翁が愛蔵した茶道具には「即翁與衆愛玩(そくおう よしゅうあいがん)」の蔵印が用いら

れており、その言葉は自らが蒐集品を独占するのではなく、多くの人と共に楽しみたいとの即翁の想いが込められています。即翁の美意識と彼の愛した古美術の世界を紹介します。

